

国際交流2019後援事業 「アンバル・パストを囲むシンポジウム」 台風でいったん中止も関連イベントで復活開催!!

一〇月一二日に一三〇名規模で開催予定だったつどいは台風で中止となったが、一〇月一五日午後、中央大学多摩校舎にて実施の「アンバル・パストさん公開研究会」が、同大学政策文化総合研究所の主査で日本詩人クラブ会員の広岡守穂氏のご厚意で、一二日予定のシンポジウムの内容をそのまま実現するつどいとなった。主催・「詩と思想」編集委員会及び土曜美術社出版販売、後援・一般社団法人日本詩人クラブ。台風直後にもかかわらず、会場には約五〇名が集まって盛会だった。

竹内美智代氏の総合司会のもと、中村不二夫氏の開会挨拶で和やかに始まったプログラム第一部はシンポジウム「アンバル・パストの詩と生き方」。

ヒマラヤから来日されたメキシコ人女性詩人アンバル・パスト氏の詩選集『アンバル・パスト詩集』（新・世界現代詩文庫）を翻訳した細野豊氏（日本詩人クラブ顧問）の司会で、まずアンバル・パスト氏のスピーチを聴く。アメリカに生まれ育ち、メキシコに帰化し、やがてインドのヒマラヤで瞑想生活を送るようになった詩人は、飛行機で持参したヒマラヤの石を来場者に配り、その不思議に光るありようから、地球のすべてのものと私たちの関係性へと話を深めていった。「相互存在する」という造語の含蓄から、この世のすべてのつながりが強調され、「私たちと私たちの前に現れるすべてのものは大いなる詩である」「詩人とは太陽の前を飛んでいる蛍のようなもの」といったすぐれて詩的な認識が語られた。



アンバル・パスト氏

東京大学名誉教授でラテン・アメリカ研究の第一人者・野谷文昭氏は、現在の世界と日本の嫌な状況を何とかしたいと考え、絶望を阻むために、アンバル・パスト氏の詩を読むと力をもらえると指摘した。彼女の詩に出てくるモナルカ蝶の印象を語った後、社会的な視点がオクタビオ・パスにも通じるとして、アンバル・パスト氏がソーシャル・ワーカーをしてきたこととの関連も指摘した。詩は夢を見させてくれるという野谷氏のとらえ方にうなずく来場者も多かった。

日本詩人クラブ会長で詩人の北岡淳子氏は、二〇〇八年の同クラブ国際交流で一度お招きしたアンバル・パスト氏の良き思い出と共に、彼女の詩の視野の広さ深さに感銘を受けてきたと語った。特長としてさらに、自立した精神と行動力が挙げられた。そして、アンバル・パスト氏のメキシコ土産である個性的なかたちの書籍の数々を持参し、来場者に披露した。自然の中に謙虚な姿勢で居る詩人の言葉は読む人に訴える力を持っていると強調。再会を喜び、詩選集に大いに学んでいることが語られた。

日本詩人クラブ理事長で詩人の佐相憲一は、今回刊行された翻訳詩選集の特長を分析・解説した。生身の人間、特に女性が生活する現場で体ごと感じてきたものがベースになっており、その射程距離は先住民の時代から最近まで及んでいる。メキシコだったりアメリカだったり中東だったり、直接の舞台となっている土地の具体的な特殊性の奥に普遍的で根源的なものが見える。アンバル・パスト氏の詩には世界の感触があり、さまざまな文明の亀裂のただなかに原初の姿で精神が立っている。そのような詩世界に深い共感を覚える



細野豊氏



野谷文昭氏



佐相憲一氏



北岡淳子氏

と語った。

細野豊氏からは翻訳をめぐるエピソードなども語られ、来場者がこの日手にした翻訳詩選集への関心が促進された。

第二部は、ポエマ・コレクティーボという名のアンバル・パスト流・連詩の実践。詩人の新延拳氏、塩野とみ子氏、青木由弥子氏による進行で、来場者全員が独自に一行の詩句を書き、それらを後から全部つなげてひとつの詩とするという楽しい試みだった。ふたを開けてみると、バラバラに書いたはずのそれぞれの言葉がなかなか意味深長なつながりを作り出し、いつの間にかどこかシュールで面白いものができた。

今回、日本詩人クラブ創立七〇周年記念事業を前に、意義深い国際交流を後援開催することができた。すべての来場者に感謝し、お世話になった主催者の詩と思想及び土曜美術社出版販売、中央大学の広岡守穂氏、ご案内の細野豊氏に心からお礼申し上げる。そして、海の向こうに帰られた詩人アンバル・パスト氏に、再度ここから拍手をおくろう。

（前期国際交流担当、現理事長 佐相憲一）

（写真提供：土曜美術社出版販売 高木祐子氏）



ポエマ・コレクティーボ（連詩） 新延拳氏



会場風景